

# ヘミングウェイゆかりの地を訪ねて

高野泰志

## 第5回 コブレ編

3年半ぶりの旅行記になります。ずいぶんご無沙汰しております。

今回はキューバに行ってきたので、そのときのご報告を。ヘミングウェイ研究者にとってはある程度なじみがあるとはいえ、社会主義の国でそれほど海外旅行先としてメジャーではない場所です。行く前はいったいどんなところかと不安と期待に満ちあふれていたのですが、いざ行ってみると、いろいろな意味で期待を裏切られました。まずは今回はヘミングウェイ直接のゆかりの地ではありませんが、『老人と海』で言及され、後にノーベル賞のメダルが寄付されたコブレの教会について報告いたします。

### 1. サンチアゴ・デ・クーバ

今回の旅行は、カナダのトロント経由でハバナのホセ・マルティ国際空港に到着し、まずはハバナ新市街で1泊した後にキューバ第2の都市サンチアゴ・デ・クーバに飛びました。当初はキューバなど小さな国だから、ハバナからすぐにどこにでも行けるのだろうと考えていましたが、サンチアゴまでは飛行機か、あるいはバスで14時間かけて行くしかないとのこと。ちょっと驚きました。

今回は旅行日程のアレンジや通訳など、Brisa Cubanaの瀬戸くみこさんという方に大変お世話になりました。キューバ航空のチケットなどの手配もすでに終えていただいていたので、その辺の手続きは何もしないでよかったので大変楽でした。瀬戸さんにそのとき言われたのが、ハバナはそれほど治安が悪くないけれど、サンチアゴはあまり柄のいい土地ではないので気をつけるように、とのことでした。そしてよりによってサンチアゴでは（貧乏旅行だったせいで）、まったくのひとり旅です。着いて1日でキューバの事情もほとんど分からない状態で、そんなことを言われてちょっと不安になってきます。

朝7時のキューバ航空でサンチアゴまで向かいましたが、乗ってみて驚いたのが飛行機の中がまるでバスみたいな座席で、細いパイプでできていてめちゃくちゃ頼りないこと。なんと折りたたみ収納可！温度の調節がうまくできないのか、地上は熱帯ですが、上空はほとんど氷点下のような寒さ。あらかじめ寒くなることを聞いていたので羽織る服を鞆に入れていましたが、周囲にいる人たちは薄いシャツ一枚だけ、というような人たちばかりで、みながたがた震えていました。

アントニオ・マセオ空港には8時30分頃到着し、出口のゲートをくぐると外はものすごい人だかりです。ほとんどがタクシーの運転手で、旅行客が出てくるとすさまじいスピードのスペイン語で話しかけてきます。私はスペイン語はさっぱりなのですが、とりあえず帰りの便のリコンファームを先に済ませるべく、運転手たちを振り切って出発カウンターに向かいました。その後、ホテルまではタクシーを使わなければいけないのですが、あの人だかりに入っていくのはずいぶん気がひけます。とりあえず椅子に座って落ち着こうとのんびりしていたのですが、ふと気づくと大柄な黒人の人が話しかけてきます。やはりタクシーの運転手らしいの

ですが、自分のタクシーに乗れと行っているようです。ホテルの名前を言うと20CUC（CUCとは外国人旅行者専用の通貨で兌換ペソのこと。ドルと全く同じ価値です。ドルの流通が禁止されてから代わりに使われるようになりました）だというのですが、高いのか安いのか、キューバのタクシーに乗ったこともなければホテルまでの距離も分からないので見当もつきません。出口近くの人だかりにもまれるのも面倒なのでこの人に頼むことにしました。スーツケースを持ってきて、駐車場に向かいました。

ところがタクシーがたくさん集まっているところをどんどん通り過ぎてさらに奥の方へと歩いていきます。妙だなと思ったら、古くてぼろぼろの黒い車にいきなりスーツケースを放り込み、助手席に乗れと行ってきます。どう見てもタクシーではありません。

まあ、まずいなとは思ったんですけどね……。

スーツケースを車に積まれてしまいましたし、それを持って逃げられても困りますので、まあいいかと思ってそのままその車に乗り込みました。車は急発進し、ものすごいスピードでいきなり山の中に入っていきます。どこをどう走ったのかさっぱり分かりません。テレビでしか見たことのないようなラテンアメリカの未開の集落みたいところをたくさん通過していきます。ぼろぼろの小屋の周りに上半身裸の黒人たちがじっとこちらの車をにらんでいるような雰囲気。小屋の中で麻薬でも作ってそうな感じです（実際にはキューバにはほとんど麻薬は出回っていません。念のため）。

さすがにこれはやばいと身の危険を感じ始めてきました。運転手の男はこちらを安心させようとするかのようにしきりに片言の英語で話しかけてきますが、その英単語自体がスペイン語なまりでほとんど何を言っているのか分かりません。ジェスチャー混じりで（猛スピードで運転中に危ないこときわまりない）どうもWBCの野球の試合で日本がキューバに勝ったことを言っているらしいのです。“baseball”という言葉がやっと通じてものすごくうれしそうにしています。



fig.1 サンチアゴ・デ・クーバの中心地にある教会

どれくらい道なき道を走ったでしょうか。無事に解放してもらえるのだろうかと不安になっていた頃、急に普通の町に入り、やけに細い道を走り始めました。キューバには信号が少ないので、よく通行人を轢かないものだと思心するようなスピードとテクニックで人並みを縫って走っていきます。時々信号待ちなどして車が止まっている間、今のうちに飛び出して逃げた方がいいのだろうか、とかいろいろ考えたのですが、面倒なのでそのまま乗り続けました。

やがて急に道の真ん中で車をストップさせ、道の向こう側を指さします。私の泊まるホテルの看板が見えるか、と聞いているようです。例によってほとんど何を言っているのか分からないのですが、要するにここで降りて後は歩け、ということのようです。もぐりのタクシーなので、ホテルの前まで行ってしまうと捕まるのでしょね。とにかく無事に降りられそうなのでお金を払ってその場で降り、石畳の道をがらがらとスーツケースを引きずりながらやっとホテルに到着しました。

さすがに私も不安でしたので、ホテルに着いたときにはずいぶん疲れた気がしました。今後キューバに行かれる方はもぐりのタクシーにご注意を。キューバのタクシーはすべて車体にCUBA TAXIと書かれてあるので、それ以外の車には乗らないことです。ちなみに帰りは正規のタクシーで帰りましたが、金額は6CUCでした。まあ私の場合、2000円弱でいい話のネタができたと思んでいたのですが、万が一危険な目に遭わないとも限りませんので。

## 2. サンチアーゴの人たち

サンチアーゴからは翌日の夜10時半の飛行機で立ち去る予定で、ほぼ丸2日間の滞在予定でした。その間に1日使ってコブレまで行く予定でした。初日の間にコブレに行っておきたかったのですが、コブレには英語ガイド付きのタクシーツアーを頼まなければいけません。ただ行くだけなら普通のタクシーでもいいのですが、教会のことや『老人と海』で言及されるマリア像のことなど、いろいろ聞きたいこともありしたので。現地の旅行案内所に行って頼もうと思ったのですが、着いた日が日曜日で閉まっていました。日曜日に閉まる旅行案内所って！



fig.2 サンチアーゴ・デ・クーバの町並み1

仕方がないので初日はサンチアーゴの町をいろいろ散策しました。スペイン植民地時代の豪華な建物が今でもそのまま使われていて、まるでヨーロッパのような雰囲気なのですが、どこも修復にお金をかけられないのでしょうか、今にも崩壊しそうな状況です。町中には革命の始まったモンカダ兵営（壁には当時の戦

闘で撃ち込まれた銃弾がそのまま残っています）や16世紀初頭にこの町を作ったディエゴ・デ・ベラスケスの屋敷など、たくさん見て回るところがあって楽しかったのですが、ヘミングウェイとは関係ないので今回は割愛します。とりあえず行かれるかたは、サンチアーゴではハバナよりさらに3~5度気温の高いところであること、日中の一番暑い時間帯は熱帯気候に慣れていなければ出歩かない方がいいこと、そしてサングラスは必需品であることを覚えておかれた方がいいでしょう。朝の間しばらく歩いただけで体がだるくなってきて、自分で思っているより体が疲れているのに驚きました。



fig.3 サンチアーゴ・デ・クーバの町並み2

あともう一点気をつけるべきなのは、サンチアーゴではやたらと人が話しかけてきます。片言のスペイン語ふう英語なので分かりづらいのですが、聞いているとみな判でついたように同じ話で、私の泊まっているホテルの従業員であり、今は仕事のシフトが終わったばかり、ラム酒を買うのにいい店を知っている、食事をするには安い店がある、自分の知り合いの店なので安くできるのだ、というところ。時間がたっぷりあったので、最初のうちの何人かはどんな話になるのかとりあえず聞いてみたのですが、みんな同じ話なので飽きてしまって、4人目あたりから相手にしなくなりました。多少工夫のあるおもしろい話ならちょっとくらいだまされてもいいかと思ったのですが。

ただ決して悪い人ばかりではないのです。たとえば着いて間もない頃、公園を歩いていて驚いたのですが、向こうから歩いてくるちっちゃなよぼよぼのおばあさんが突然私の顔を見るなり「ハポネ（日本人）！」と叫んで親指を立てたガッツポーズ(?)をしてきます。何のことやら分からないのでとりあえず私も同じポーズを返しておいたのですが、あとから聞いた話、キューバ人はキューバ人であることをとても誇りに思っているのです、外国人を見ると相手の国名を言うことで敬意を表する習慣があるのだそうです（独特のポーズはキューバ人の挨拶の仕方）。昨今、日本の「愛国心」というやつは、ともすればよその国に対して敵意を示すことと同義になってしまう傾向がありますが、キューバの人のような自国に対する誇りの持ち方、すばらしいと思いませんか？ 外国人に対して敬意を表すことで愛国心を示しているのですから。

## 3. コブレへ

翌日、やっと開いた観光案内でガイド付きタクシーツアーを頼みます。値段は半日で60CUC。ちょっと割高な気もしますが、キューバはすべて国営なので、値切ることもできませんし、同業

他社に出向くということもできません。

運転手以外にエンジェルと名乗るちょっと渋い感じのおじさんがガイドとしてついてくれました。比較的分かりやすい英語でしたが、こちらの言うことはあまり分からないらしく、話しかけるとちょっといやがります。コブレはけっこう遠くにあるのですが、空港からのもぐりタクシーと違って今度は安心して景色を楽しめます。カストロとゲバラが革命戦争をしたシエラ・マエストロの山並みを眺めながら、クーラーの効くきれいな新しい車で快適なドライブを楽しみました。

1時間くらい過ぎた頃でしょうか、やがて遠くの方に教会が見え始めます。それこそキューバの漁師たちにこよなく愛されているマリア像のある教会なのです。

教会に近づくとつれて、徐々に教会にお参りする人たちの数が増えていきます。あちこちにお供え物(?)を売っている売店があり、これまでののどかな風景とは一変して活気にあふれています。いよいよ教会の中へ、というところで紙面が尽きたので、以下次号といたします。肝腎の「ゆかり」の部分がほとんどなくて

すいません。今後、コブレの続編に続いてフィンカ・ビヒア、ハバナ旧市街、コヒマルなどの様子をお伝えしたいと思います。おつきあいいただければ幸いです。



fig.4 遠くにコブレの教会が